

## 第五節 ポンベの衛生行政

わが国における衛生行政中、最も早く取扱われたのは天然痘対策である。延享元年（一七四四年）に渡来した清人李仁山は種痘を伝えた。長崎の医師柳隆元、堀江道元等は長崎奉行松波備前守の命により中国式鼻孔接種法を学び、この種痘法が行われるようになったが、一方、ヨーロッパにおいては、これより先、享保二年（一七一七年）、トルコ駐劄イギリス大使モンタギュー Edward Wortley Montagu の子息が同地でトルコ式種痘を受けた。然し、このような危険な種痘法でなく、牛痘による近代的種痘法がゼンナー Edward Jenner によって発見されたのは寛政八年（一七九六年）であった。この種痘法は現在行われている簡易で完備したものではないが、ゼンナーの種痘は最初多くの反駁を受けつつもヨーロッパ及びアメリカに普及し、文化二年（一八〇五年）には中国広東に伝来した。その後、この新しい種痘法は

わが国にも漢籍を通じて知られたが、文政六年（一八二三年）渡来後間もないシーボルトは長崎においてこの種痘法を試みた。然し牛痘苗の腐敗によって不成功に終わった。その後、弘化四年一月四日（一八四七年二月十八日）、榎林宗建の伺書により、鍋島藩では牛痘苗取寄を審議し、一月十三日（陽曆二月二十七日）にその許可を得、御側役徳永伝之助は宗建にその旨を伝えた。翌嘉永元年六月（一八四八年）モーニッケの渡来に際して牛痘苗を持参したが、これ亦腐苗していたので、更に取寄を依頼し、嘉永二年六月（一八四九年）、牛痘漿及び痘痂を取寄せた。この時の痘痂は活性であったため、種痘の成功をみたのである。以後種痘は盛んになった。

ポンベはシーボルトの種痘伝授が政治的理由によって葬られたと考えていたが、モーニッケの種痘の成功後、ファン・デン・ブルックが多忙のため、種痘施行が衰え

たのを歎き、着任後間もなくこれを施行したのであった。即ち、安政四年十一月十二日（一八五七年十二月二十七日）にはポンペは大村町の伝習所において始めて公開の種痘を行った。二才以上の小児七人と七才半の小児一人に施行したが、毎週水・土の二日宛、ポンペ自身その施行に当った。天然痘は安政元年及び二年に大流行があつて、多数の死亡者を出していたが、安政四年十一月十七日（一八五九年一月一日）以後、天然痘の流行が甚しく、当時の長崎に痘苗もなかったので、ポンペは中国経由で痘苗を入手した。然しこれは不活性であつた。その後、長崎奉行所も二・三頭の牛を提供し、ポンペはバダビア政庁の医務課長に依頼して痘苗を入手した。一八五八年（安政四年十一月十七日より安政五年十一月二十七日まで）中に二百十八人の一才から二才までの小児に種痘を施し、一五五九年（安政五年十一月二十八日より安政六年十二月八日まで）中に約千三百人に種痘を施行した。又、ポンペは各藩の種痘の統計を集め、且つ指導した。

医学伝習開始後、間もなく、天然痘流行に気付いたポ

ンペは直ちに公開の種痘を施行した他、安政五年三月には幕府に対して建白書「種痘植付方取扱之記略」を記し、クルチウス及び岡部駿河守等の援助のもとに種痘対策を講じようとしたが、その後も長崎奉行所の援助のもとに、前記のような種痘に対する対策をなしたのである。ところが、養生所の設立をみた後、ポンペは愈々その初志を貫くべき時機を得たのである。

ポンペが安政五年三月、幕府に対して種痘施行に関する建白書を提出して三年後の文久元年十月六日（一八六一年十一月八日）、長崎奉行所は再び種痘実施を幕府に進達した。即ち、岡部駿河守は高橋美作守と連署して「長崎於養生所種痘御施行之儀ニ付申上候書付」を發し、十月十九日（陽曆十一月二十一日）、佐藤清五郎を経て幕府に届けられたが、種痘施行が長崎奉行所の理解ある処置によつて、近代的方法で一般に公開されることになった。奉行所は支配向及び市内・郷中に対し、養生所において文久二年二月十五日（一八六二年三月十五日）より毎月辰及び戌の日毎に種痘を施行するので、天然痘罹患

## 第五節 ポンベの衛生行政

の小児があつたら正九ツ時より八ツ時（正午より午後二時）頃までのうちに養生所に同伴するようにと申渡した。これによって、ポンベは新病院開設後、一週に一度日時を定めて種痘を行ったので多数の小児が来院した。その受付、痘苗保存、種痘の症状の記載、痘苗の移出などはポンベ自身が行い、次第に普及した。鍋島・島津藩等でも種痘を法令化し、江戸にも種痘所が設立された。ポンベの門人八木弥平が『散花小言』を刊行したのは安政五年であつたが、ポンベの強力な意志は最後まで強く完結されるまでの努力を吝まなかつた。この不屈不撓の精神は西役所における就任挨拶の際に学生たちに向つて要請したところであり、自らもここに実践したところでもあつた。次に養生所における種痘の施行令を示そう。（「從萬延二年至文久二年、文書科事務簿、手頭留、公事方」）

### 支配向江

於養生所来ル十五日ハ月々辰戌之日毎ニウゑ痘瘡施行いたし  
為遣候間痘瘡前之小兒有之もの者正九ツ時ハ八ツ時頃迄之内  
養生所ニ連越相願可申候右者引請人ニ不及直ニ罷出可申候  
右之趣市中郷中江相触候間其得意支配之者江も可申聞置候

戌 二月六日（二字朱）

さて、安政五年（一八五八年）はわが国では種々の意味で多難な年であつた。一月五日（陽曆二月十八日）にアメリカと仮条約を結ぶこととなり、三月五日（陽曆四月十八日）に調印されようとしていたが、反対意見が強く、日米修好条約締結の遅延は遂に閣老の交代を来さしめ、四月二十三日（陽曆六月四日）、井伊直弼が大老となり、更に調印日限の延期をなして六月二十日（陽曆七月三十日）、漸く仮条約の調印が行われた。これが安政の大獄や桜田門外の変を来さしめた原因であり、更に種々の国際問題を起さしめた。この仮条約は全くの国際問題の形態をとってはいるが、これ亦大きな国内問題であり、後に養生所の存立・移管にまで関係して来た処で、前記のようにこの年の夏はコレラの大流行があり、その治療には、ポンベ等が活躍したが、ポンベや緒方洪庵等のオランダ医学がその効を示すと、多紀氏を中心とする漢方医家団の政治的野心から洋医学を減ぼそうとする動きを示していた幕府も、遂に七月八日（陽曆八月十六日）

に至って、蘭医の学習を公式に許可したのである。

このコレラの大流行の伝染原は中国で、伝染経路はアメリカのフレガット艦ミシッピ号 *Mississippi* が中国経由、長崎に入港し、艦員に患者がいたためである。

ミシッピ号は安政五年五月二十一日（一八五八年六月三十日）、長崎港に入港し、二十二日（陽曆七月二日）には長崎奉行所より御目付石川周二及び同役飯田孫三郎が同船に派遣されて、立合の上、祝砲を発射する予定であった。然し、実際には二十五日（陽曆七月五日）に発射された（「従安政四年至同五年、手頭留、荒尾石見守ニ在勤、公事方」）。この入港艦がわが国に夥しい死亡者を来す結果となったコレラの伝染経路をなす媒体とは誰も知る人はなかったであろう。この流行は誠に悲惨な状態を各所に齎した。この長崎に入港したミシッピ号の艦員は中国からコレラを伝染し、長崎を始め、日本の西半部に蔓延し、遂に数万の死亡者を出した。この際、ポンペは種々の対策を行い、大村町の伝習所にいた学生等の協力によって治療を施し、長崎奉行所を通じて衛生行政の実

施をうながし、且つ病院設立の急務を説いて止まなかった。ポンペの指示によるコレラ対策は長崎奉行岡部駿河守の全面的に賛同するところとなり、治療及び予防法を示した訓令を作製し、七月十三日（陽曆八月二十一日）にこれを長崎市中及び代官領内に布告した。

当節流行病相煩候もの多分ニ有之いづれも劇症ニ而医療間ニ合兼貧困のものハ手当も不行届之ものも有之哉ニ相聞候間大村町伝習所江医師相詰させ置療治可為致咎ニ付相煩候者ハ明十四日ハ昼夜ニ不限早速同所江申出候ハ、詰合之医師さし遣す咎ニ而可有之尤輕症之者者同所<sup>五</sup>罷越診療を請候様ニも可致候

右之趣市中一統江不洩様早々相触可申尤町役人等之手数ニ不及銘々当人共々直ニ伝習所<sup>五</sup>申立候様可申渡候

七月十三日

右之通市中江相触候間郷中者勿論支配之向ニおゐても同様相心得候様早々可被申渡候

この達と共にポンペの指示による食品衛生が示され、魚類中、鰯、鯖、鮪、蛸、野菜の内、南瓜、唐黍、茄子、冬瓜、胡瓜、蒟瓜類一切、菓物一切の食用を禁じ、七月十四日（陽曆八月二十二日）には、翌々十六日（陽

## 第五節 ポンペの衛生行政

曆二十四日)の盆後に鶏及びその類の食用を禁じ、この節はこれ等の類のもの一切の食用を禁ずる旨を口達し、同日、岡部駿河守は、コレラにより大村町の伝習所の施薬を受けて全治した者はその旨を同所に届出すよう口達した。七月下旬、劇症患者は減少し、八月朔日(陽曆九月七日)より伝習所詰医師達の臨時勤務は見合せとなった。然し、療治中の患者は伝習所の投薬を申請してもよい旨の達しがあり、長崎のコレラ流行は九月下旬に殆ど終焉し、ポンペのコレラ対策法は『転寝の夢』その他に印刷され、全国に配布された。ポンペのコレラ治療法はヴンデルリッヒ Karl August Wunderlich のコレラの処方により、硫酸キニーネ及び阿芙蓉を与え、温浴を施さしめるものであった。この臨床的経験と衛生行政に対するポンペの見識とは長く学生たちに印象を残し、しばしば思出として語られているが、同時に又、ポンペの医学教育の完成のための病院建設の意図も岡部駿河守の好意によって実現を早からしめる契機を得た。「文久二年壬戌杳月起、巫官吏往復留、外務局」によれば、入港

船に対して、コレラ又は伝染病患者の有無を入港船に搭乗する医師によって臨検することを要請した。

### 達書

支那港より渡来之亜米利加船舶長ニ

在長崎合衆国コンシユル館

千八百六十二年九月十五日

一 支那港より渡来之諸船舶は碇泊以前堅固状為差出候様運上所司長江戸表より被命候右之義ニ付拙者在留亜米利加

ミニストルより右之告知を受取候

一 亜米利加船舶着致し右堅固状所持不致故碇泊之義差留られ候ハ、貴下医官右船中江遣し弥コレラ又伝染病之者無

之義同人相証候ハ、船長江碇泊相免可申候

一 船舶之船長共右之命ニ随ひ候義を相否或ハ等閑候ハ、港内掟相破候為過料之可及沙汰候

千八百六十二年九月十五日自筆并コンシユル館の印を調す

合衆国コンシユル

ジョン・ジ・ウァルス

右文意和解仕候以上

八月廿四日

植村作七郎

横山又之丞

「從万延二年至文久二年、文書科事務簿、手頭留、公事方」に次の文書がある。

#### 支配向江

当節コレラ病流行いたし死亡之者不少哉ニ相聞候右者全ク藥劑等不行届ニも可有之候間此度養生所において御施藥被成遣候間同所<sup>ニ</sup>可願出候尤病症ニ寄願次第同所より医師罷越候筈ニ有之候

右之通市中下々迄相觸候間支配之もの<sup>ニ</sup>も可申聞置候

戊 七月四日（二字朱）

即ち文久二年（一八六二年）も亦コレラの爆發的流行が起り、それに対するポンペの衛生行政の実がここに稔ることとなったのである。ポンペは安政五年のコレラ大流行後、病院建設の急務を説いて止まなかったが、コレラ治療を充分になすことを得せしめたのである。事ある度にポンペに辛く当っていた長崎奉行高橋美作守は閏八月十三日（陽曆十月六日）に遂に「思召有之御役御免被仰付候旨從江府被仰下候条支配之者江可申聞置候」と達せられて、職を辞したが、ポンペの言葉によればしばしば駐日外交使節団からその不信任案が提出されていた

のである。ポンペは養生所にあつて、コレラの対策に尽力し乍ら、政治的陰謀の崩壊や成立を冷静に眺めていたのである。種痘と同様、コレラの場合も亦、不充分乍らポンペの初志を貫徹することのできたものであり、又、その成果も文久二年に稔つたのであつた。

処で、再び繰返すことになるが、ポンペによれば、コレラが中国に入つたのは文政五年（一八二二年）とし、日本に初めて入つたのは天保二年（一八三一年）としており、安政五年、約六万の人口をもつ長崎における罹患者は千五百八十三人で、そのうち、オランダ人が六百一人（男二百五十九人、女二百八十八人、小児五十四人）の患者中、治癒者三百八十人、死亡者二百二十一人で、死亡率は三十六・四三％で、多くは二、三日間で死亡し、千五百八十三人の罹患者中、日本人の取扱つたコレラ患者は九百八十二人で、そのうち治癒した者は四百三十六人、死亡者は五百四十六人で、死亡率は五十五・五％であると云う。ポンペの時代のコレラ対策は今日の眼から見れば誠に隔靴搔痒の感があり、統計にしても簡単な百

## 第五節 ポンベの衛生行政

分率で、特殊死亡率の概数十二・八%を表わしてはいない。まだコレラ菌の発見（一八八三年、コッホによるコンマ菌即ちコレラビブリオの発見）もない頃で、对症的療法としては前記のようにキニーネ剤をよく用いていた。安政五年六月十三日（一八五八年七月二十三日）、ロシアの軍艦アスコルド号 Askold が長崎に入港したが、この際、乗組員二十人を診療した。（最初、奉行所は患者を長崎の一寺院——稻佐悟真寺か——に収容した。十六日即ち陽暦二十六日にポンベは往診して治療した。）この際の患者中（皆壊血症）四人死亡したが、死因は肺結核（一人）、赤痢（一人）、チフス（二人）で、二ヶ月余に再入港した時は上海から赤痢を伝染して来ており、二十九人を診療した。当時腸チフスは六種の熱型に分類していたが、投薬には皆キニーネを用いた。赤痢、チフスに対してはまだ伝染病対策を行つてはいないようであるが、これはまだ病因が知られていなかったためである。池田謙斎は漢方薬の使用を回顧した後、「それをポンベが来てから、色々の薬品を取寄せ、其用法等を授けたの

で、初めて洋法の内科の方にも一段の進歩を与へたのじや。私がまだ江戸にいた時分、右のポンベ伝の松本順氏が、規那塩十五瓦頓服とか、遠志根半弓の浸剤に、硝石四匁など云ふ処方をしてゐたので、当時の医学社会を驚かし。為めに或ものは松本に向て「キナ塩殿前のポンペー遠志硝石大量居士」なんていふ法名を付けた位、悪戯ごとの上にも、当時の有様が躍如として居るじや。それもその筈じや、その時腸「チフス」なんか六通りの熱病に分けて居た位で、其症状に依て色々の名があつたのじや。これも病体解剖が初まつて、「腸チフス」の本体が明にされて、漸くわかつて来たのじや。イヤ昔のことを思ふと、今日の医学の進歩は実に驚かるゝばかりじや。」と述べているが、司馬凌海の『七新薬』によつても視えるように、衛生行政のみならず、治療方面にも最善を尽していたポンベの姿が描き出されているのである。

最後に梅毒対策について述べよう。元来、梅毒はアメリカ大陸発見後、ヨーロッパ諸国を通じてわが国にも伝播されたが、ケンペルも既にそれを長崎において記載し

ており、相当広範囲に伝染していたようである。長崎ではその研究は吉雄耕牛、志筑忠雄などによってもなされていたが、志筑忠雄の門人末次忠助はそれを恐れてオランダ商館医ヘーゲン Gerrit Leekdert Hagen の治療法などを伝えていた。安政四年（一八五七年）、ポンペは渡来以後、直ちにオランダの船員たちが長崎の公娼を側に置くことのできることを発見し、オランダ人の治療に当たっていた関係で、翌年一年間のオランダ人受診者七十人中、性病患者は十八人（そのうち慢性痲疾五人、第一期梅毒は九人、第二期梅毒は四人）であったと報告しているが、こうした梅毒罹患率の高いことは公娼制に基因するものと考えていた。又、同年の日本人受診者九百十八人中、梅毒患者は第一期梅毒が十一人、第二期梅毒が十七人（臭鼻三、咽喉痲爛及び皮疹三、咽喉痲爛一、陰部痲爛一、舌痲爛二、梅毒性結節一、薔薇疹一、膿疱疹一、骨化膿三、骨膜贅骨腫一）であったと記載し、日本人は公娼制によって、貧困から逃れようとし、貧乏人は息女を七才から娼家に売り、十五才より接客せしめ、

二十五才に及ぶ、と公娼制を批難し、性病対策―検梅制度の施行―を説き、梅毒の病理学的、治療学的意見を述べて、これを長崎奉行所に上申した。然し、長崎奉行所は如何なる政治的権力を発動してもこれを制限することではできないとしてポンペの申出を拒絶した。その後もしばしば上申したが、常に回答は同様であった。

ポンペは帰国に至るまで幕府に対して梅毒対策を講ずることを幾度も求めたが、ポンペの「遊女屋に対して嚴重な医学的監督が必要である。しかし、日本にはこの方面の対策が講ぜられていない。この監督は政府の義務である」という要求に対し、幕府は「健康を保つだけのために、甚だ困難なことを娘に強いることはできない。身体は誰でも何とも云ふことのできぬ所有物であり、権柄でもだめである」という回答をしか与えなかった。即ち、ポンペの衛生行政中、性病対策は公的には遂に実現できなかったのである。然し、外国の要請によってポンペの在任中、検梅を実施したことがあった。それはポンペ自身が行ったのではないが、ポンペの講義を基として実施



## 第五節 ポンペの衛生行政

されたのである。ポンペが在任中、他の出島のオランダ商館医たちのような艶聞がなかったのもこうした梅毒に對するポンペの見識によるのかも知れない。前記の梅毒は、万延元年六月十九日（一八六〇年八月五日）ロシア海軍々医が丸山において行おうとしたが、拒絶され、稲佐においてロシアマタロス休息所を設ける際、九月より検梅し、開所された。その頃松本良順はポンペに検梅法を学び、ロシア軍艦ボスサジニカ号の提督ビリレフ Bireff の依頼によつて一、二度検梅に従事したが、その後、門下生に代つた。性病対策が公式に行われたのは明治以後で、それについては後に述べる。

ポンペの衛生行政や伝染病に對するキニーネ使用は相當な評判となり、池田謙齋もこれを回想しているが、ポンペの伝染病に對する衛生行政や治療は當時としては相當な程度に進歩した形態を備えしめようとして努力した跡が見出される。今日を以て昨日を罵るならば、過去における努力も誠にはかないものではあるが、洋式医学を基本的な面から建設して行こうとしたポンペの善意と誠

意には深い敬意を捧げられるべきであらう。唯、その努力だけを取上げて云うならば、ポンペ自身の學問的研究を進める場として求めて來た長崎が、ポンペにとつては全く自分の研究を推進せしむべき地とならなかったことは誠に不本意であつたに違ひない。

ここで、ポンペ等が後年、キニーネの使用によつてニックスネームを得たことに關連して、『七新藥』について記して置こう。この書はポンペがドイツのウーステルン及びワグネルの説によつてキニーネ、モルヒネ、肝油、吐酒石、硝酸銀、ヨード、サントニンの七種の新しい薬品を解説したのを司馬凌海が文久元年（一八六一年）に編纂し、三月二日、板下を大坂の秋田屋に送つたのは三月二日（陽曆四月十一日）と、十一月十二日（陽曆十二月十三日）、下巻板下であるが、十六日（陽曆十二月十七日）には中巻が秋田屋より長崎へ届けられていて、関寛齋が校補して刊行したのは文久二年（一八六二年）であつた。なお文久元年十一月二十四日（一八六一年十二月二十五日）、司馬凌海はポンペの藥物學講義録『朋

百氏藥論』の序（陽暦日付）をボンペに草して貰い、明治二年（一八六九年）に刊行した。

## 第二章 長崎医学の基礎